

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 4 日現在

機関番号：53701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02474

研究課題名(和文)岐阜県の放課後子ども教室の実施率向上に資する活動環境整備の研究

研究課題名(英文) Research on improvement of activity environment that contributes to increase the implementation rate of after-school children's classes in Gifu Prefecture.

研究代表者

櫻木 耕史 (Sakuragi, Koshi)

岐阜工業高等専門学校・その他部局等・准教授

研究者番号：90781790

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：放課後子供教室の実施率が岐阜県で低い理由は、その地域性にあり、放課後子供教室以外の方法で子どものための活動を行っている自治体が多いこと、参加者の確保が厳しい自治体が多く存在することが理由であると判明した。人口減少を背景として、子どものための活動は子どもに地域の魅力を伝え定住を促す取り組みへとシフトしており、既に制度を超えた取り組みが始まっていた。そこで、地域の持続可能性を加味した「地域における子どもの学びの場」として活動が良く、放課後子供教室が未実施自治体のある地域において、地域における子どもの学びの場としての活動を試行し、人、活動内容、地域資源の3つの条件が必要であることを導いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

放課後子供教室は、地域社会と子どもをつなぎ地域の居場所としても有効である。しかし、地域性があり日本全国で同じように実施できず、子どもも見守りや指導を行う大人も確保しやすい都市部で実施しやすいことが分かった。

子どもは自分の生活圏を決定できないが、通信技術の発達で、都市の価値が瞬時に一方的に伝わる社会に生きている。地方に住む子どもたちが、地域の中で自分たちの思いや考え方を形作るためには、その生活や価値に触れ、考える機会が大切であり、これが地域の持続可能性に大きく貢献する。様々な自治体で取り組まれている子どもの学びの場は、日本の地域社会の持続可能性を見出すことができ、社会的意義が高いと考える。

研究成果の概要(英文)：The reason for the low implementation rate of after-school children's classes in Gifu Prefecture was due to the following two regional characteristics.(1) Many local governments were engaged in other activities for children than after-school children's classes. (2) Many municipalities were small population, so they had difficulty in participants. In many municipalities' activities for children, with the aim of ameliorating population decline, they want to encourage settlement by communicating to children the attractions of the community. Therefore, it can be said that activities are good as "a place for children's learning in the community" that takes into account the sustainability of the community.

We conducted a trial of activities as a place for children's learning in a community in a municipality where after-school children's classes had not yet been implemented. As a result, we found that three conditions are necessary: people, activity content, and local resources.

研究分野：建築学

キーワード：子ども 学び 地域

1. 研究開始当初の背景

放課後子供教室は、子ども達と通常接する機会の少ない大人達との交流の場として、お互いにとって魅力を持っている。子ども達にとっては、学校で行われる種々の評価とは異なり、成績もつかないが、地域の大人達に認められるという、自己の存在や自己の地域での役割を自覚できる場所として機能する。一方、大人達にとっては、子どもへ教えたり、一緒に活動することによって、刺激を受けたり、生きがいとなったりすることで、地域における自分の役割を自覚する場として、大きな活力を生むものである。

現在の日本は、極度に地方から都市へ、人、もの、資産が集中し、地方の衰退が目立つようになってきている。これは、教育の面でも顕われ、学校や公共施設の統廃合、縮小化をはじめとする政策転換が行われ、本質的に非効率で「公」が担うべき教育に、費用や効率を優先することに違和感が無くなっている。これにより、ますます有能な人材が流出し、教育環境が悪化すると、さらに人口の流出を招く状況にある。しかし、子どもにとって、生まれる環境の選択権はない。子どもの、豊かな育ちを保障するためには、教育を受ける機会が均等に与えられることが重要である。さらに言えば教育の機会の均等は、子育て世代が居住地を選定する際に重要視するポイントであり、子どもの将来を考えると、教育環境の充実は保護者としては無視することができない。

これまでの研究¹⁾により、放課後子供教室の都道府県別で市町村毎の実施率は、島根県の100%から鹿児島県の21%とばらつきが非常に大きく、東京都や大阪府の大都市部は80%と高率である一方で、大都市周辺部となる岐阜県や栃木県は30%台であるなど、機会が均等に与えられているとは考えにくい状況である。

都市の子ども達と、地方（農山村）の子ども達とは、背負うものが異なっている。景観法に基づく景観地区、伝統的建造物群保存地区、文化的景観、農村景観など、様々な景観を資源として活性化を図ろうとしている。このような景観は、地方にあることが多く、農山村やかつて商業の栄えた地域がほとんどである。景観を維持していくということは、景観を作り上げた生活の価値を、次世代を担う子どもたちに託すことであり、子どもたちは知らないうちに大きな期待を背負っている。しかし、こうした地域においては、交通が不便であったり、生活利便施設が少なかったりと、現代社会の日常生活を送るのには、少なからず支障がある。こうした地域において、子どもたちが何を得て、どんなことを考え、どのようにしたらこうした地域で生活できるのかを、そこに現在住む子どもだけでなく、居住地にとらわれずに体験し、人間関係を構築することなどによって、子ども達も大人達も総合的に考える必要がある。このような気づきや体験のきっかけの場として、地域全体を放課後子供教室の実施場所として構築するような新たな工夫が必要であると考えられる。

このように、放課後子供教室を、子どもの居場所や、放課後の預け先、教育環境の1施策に終らせることなく、新しい時代につないでいく1つの手段として、地域を創造する活動に格上げしていく必要があると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、岐阜県の放課後子供教室を対象として、放課後子供教室の活動実施率向上に資する環境構築の検討を行うものである。

近年、情報環境の変化により、子どもたちは仮想世界での交友関係が広がる一方で、直接的な交友関係は学校一辺倒になり社会性の習得が遅れていると感じられる。そのため、地域の他世代と交流する放課後子供教室の実施率の向上は、子どもに居場所を与え、将来の良好な社会の発展に寄与すると考えられる。

また、都市居住者の視点では、情報化により都市と地方の生活に関わる情報量の差は減少していると捉えられるが、実際は生活の大半がサービスを受けることを前提とした都市居住と、生活の環境自体を自分たちで確保する必要がある地方においては、その格差が可視化されますますます人口減少が進む結果となっている。子どもたちは居住環境を選べないことから、それぞれの地域において豊かな学びが保障されることが大切であり、学校以外での学びの場の環境として放課後子供教室の実施は、有効であると考えられた。

そこで、本研究では放課後子供教室に着目して、以下の2点を目的として研究を行った。

(1) 岐阜県における放課後子ども教室等の実施状況の把握

子どもの成長環境や教育環境の地域差に着目して、放課後子供教室の実施率の低い岐阜県を調査対象として、放課後子供教室の実施状況を把握するため、岐阜県内全自治体にインタビュー調査を行う。調査の対象は、放課後子ども教室とそれ以外の地域における子ども学びに資する社会教育的な活動の実施状況である。インタビュー調査の結果をもとに、放課後子供教室の実施環境や実施条件を明確にし、実施率向上に不可欠な要素や要因、阻害要因などを考察することが目的である。

(2) 放課後子供教室の新たな展開への検討

岐阜県内全自治体へのインタビュー調査において、放課後子供教室を実施していない自治体での、子どもの地域での学びの活動の有無の把握から、先進性を有する取り組みについて把握し

のような自治体では、学区にとらわれず広域で放課後子供教室を実施し参加者を確保することが必要である。そうすることで子どもに地域や人々と繋がる機会を与えることができる

と考える。
岐阜県において放課後子供教室の実施率が低いのは、放課後子供教室以外の方法で子どものための活動を行っている自治体が多いこと、参加者の確保が厳しい自治体が多く存在することが理由であると判明した。岐阜県では人口減少を背景として、子どものための活動は子どもに地域の魅力を伝え定住を促す取り組みへとシフトしており、既に制度を超えた取り組みが始まっている。そのため、一様に放課後子供教室の実施を求めるのではなく、各自自治体の差異を許容し、未実施の自治体については地域の魅力を伝えるような活動を行っていくことが重要である(図2)。

(2) 放課後子供教室の新たな展開への検討

①建物の価値と意義を評価

建物の価値と意義を評価するため、建物と生活の関係に着目し、建物の位置関係を調査した。歴史的建築総目録データベース³⁾より、全国に残る10箇所の味噌蔵と主屋の関係について調べた結果、味噌蔵の7/10箇所は主屋から離れた位置にあり、6/10箇所は敷地の奥に配置されていること、さらに山本らは、蔵の配置は主屋を冬の風から守る位置にあることを示している⁴⁾。そこで、西森の冬の風の計測を令和3年12月28日に行ったところ、北東、東北東、東に卓越していた。シングラ、シチグラ、ナカグラが冬の風から主屋を守る位置関係にあり、蔵の配置は冬季の風向を示している可能性があることを把握した。

さらに、大湫宿の住民にインタビューを行ったところ、昔は共同で味噌を作り、西森で保管をしていたことや、味噌を作るために必要な麴を作る共同の作業小屋が宿場内にあり、麴ができるまでまちの人が交代で番をしていたことが分かった。

これらのことから、街道に面して建てられた味噌蔵・穀蔵は、人々のつながりや、味噌を作るという生活の在り方が配置に影響しているのではないかと考えられ、住民が共同して生活を維持する相互扶助の精神である結の1つではないかと推測した。

②活動内容の検討

味噌蔵・穀蔵を学びの場とするために、活動内容について検討した。検討の条件を、蔵を使うこと、生活と繋がりがあること、継続性が生まれること、学校ではできないこと、地域に指導者がいることとした。この条件から、元の建物の使用目的であった味噌を題材とした活動を行うこととした。長年使用されていないが、名称からも建物の環境が味噌の発酵に適していると考えられるため、蔵を使うことができる。生活との繋がりで、味噌は現在の生活でも身近なものであり、年齢にかかわらず皆が知っているものである。また、味噌の発酵は1日で終わるものではないため、活動の継続性も生まれる。地域に指導者がいることで、味噌についての学びだけでなく、同時に大湫宿の暮らしや歴史、人の繋がりも感じることができ、学校とは違った学びを生むことに繋がると考えた。

③活動の試行と条件の整理

活動の実施にあたって、活動内容とそこから生まれる効果を予測し、活動プログラムを決定した。生活性、関係性、学びの発展性、景観の維持・安全性の4つの観点を設定し、これらの活動プログラムを実施することで、生活との繋がりがあ地域資源を活用したまちへの愛着を育むような学びの場の構築に繋がると予測した(図3)。

そのうえで大湫宿での3回の学びの場の活動を実施した(表1)。

味噌の保管する環境を調べることで、建物と食の関係の学びを目指した生活性は、味噌の状態から蔵の環境が味噌の保管に適していることを可視化し、蔵の価値の再評価に繋がった。

新しい人の繋がりがや学びをもたらす関係性は、子ども年齢を制限せず活動できるようにしたこと、親や地域住民も参加し、子ども同士で自然と年齢が上の子が下の子に教える姿や継続的な活動から自分の分かることを分からない人に教える姿が見られ、子どもにとって、学校では関わるこ

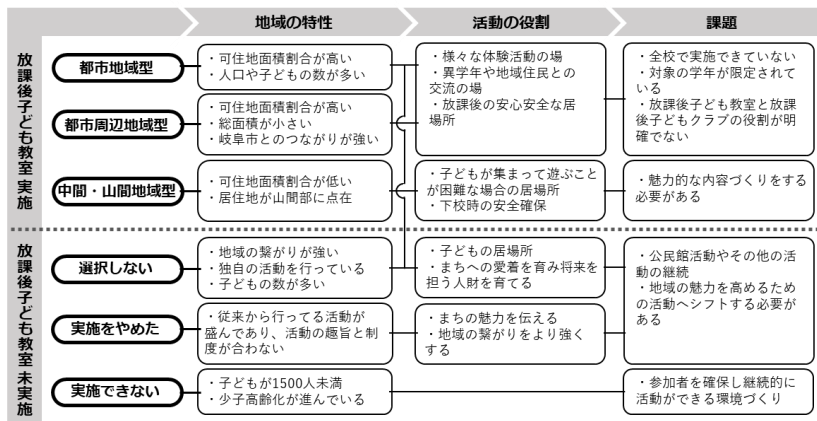


図2 放課後子供教室の活動と課題

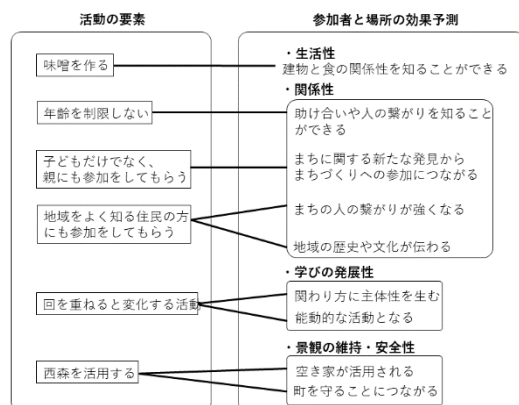


図3 活動の要素と効果の予測

のない比較的年齢の離れた子ども同士や大人との関わりの機会となり、子どもが学びの主体となる新しい関わりが生じた。

学びの発展性は、味噌が変化するものであること、適切な保管が必要なこと、西森の蔵に保管していることから、常に発酵の状態が気になり、同時に建物も気になる存在となる。これにより、参加者からの声掛けがあり、第2回は自然発生的に活動が開始された。あらかじめ決めた活動だけでなく、情報共有や味噌の状態を見るなどの小さな活動が起こることがあり、自主性や能動的な活動を生み、居場所機能の構築に繋がることが分かった。

景観の維持・安全性は、活動をきっかけに初めて西森に入るということから、建物への興味、愛着へと繋がる。また、第1回の活動で、蔵と醸造の関係を紹介したところ、蔵の価値の理解が参加者の所有する蔵の自主的な補修と活用が始められた。建物について知る、触れる、使うことで、町並みを残して伝えていくことに繋がってゆく。

以上より、地域の特徴的な資源を活用した子どもの学びの場には、地域資源の条件として、生活の中に存在価値を見出すこと、活動内容の条件として、暮らしと学びが繋がる活動、まちの歴史や生活を守り、世代を繋いでいく活動であること、作業したものが変化し、常に気になるものであること、学びの深さを年齢で差がつけられるもの、人の条件として、継続して指導者がいること、どんな年齢でも活動できることが考えられる(図4)。

この活動の試行から、他地域でのあり方を検討する。

大湫宿は子どもの数が少なく、参加者自体も多いわけではないが、地元住民を通じた声掛けで、すぐに参加者が集まり、目的の共有もスムーズであった。その理由として、宿場の歴史や祭りなどから人の繋がりが生まれ、まちづくり活動となり、さらに生活の一部となっていることが背景にあると感じる。このような地域では、暮らしとの繋がりを活かした学びの場の構築方法で効果があり、地元の方の暮らしの中の記憶や技能を活かした住民主体の学びの場を作っていくやり方が良いと考える。

一方、都市などの、人の繋がりも地域資源も希薄で、自分の暮らしに必要なものや人と繋がることがない。この場合は、生活の中で地域の繋がりを持つものは学校のみとなる。そのためこのような地域では、放課後子供教室などの制度を利用することが効果的である。

表1 活動試行の内容

第1回	
内容	味噌づくり 2022.5.28 参加者7人(3家族)+学生5名
活動の流れ 活動で見られた様子	
準備	豆を4時間煮る 地域住民が、過去に使用していた 麹蓋(木製の箱)と麹を提供
集合	(西森) 本日の流れを説明
活動	活動の目的について説明 味噌について 蔵について
	1. 豆をつぶす 住民同士が昔の味噌づくりについて話す
	2. 塩と麹を混ぜる 参加した子どもに、他の発酵食品に興味を持つ言動が生まれる
	3. 豆と塩麹を混ぜる 中学生が小学生に教えるなど、主体的に活動に参加
	4. 団子状にし味噌団子を作る
5. 味噌団子を桶に詰める	
味噌を保管する	参加者の多くは初めて西森の味噌蔵に入る
第2回	
内容	味噌の状況の確認 2022.9.18 参加者3人(1家族)+学生4名
活動の流れ 活動で見られた様子	
活動	活動の目的について説明 味噌温度と蔵の室温、気温の測定状況の説明 発酵と味噌の状態の確認
	味噌の状態を観察する 参加者からの声掛けにより味噌の発酵状態の確認を行う 完成したら試食してみたいとの要望 自宅の蔵が良いことがわかり蔵の改修に着手したとの話があった
第3回	
内容	味噌の状況の確認 2022.9.18 参加者4人(1家族)+学生4名
活動の流れ 活動で見られた様子	
活動	活動の目的について説明 味噌の状態の確認と味噌の天地返し 麹の観察 保管場所による発酵状況の違いの確認
	1. 天地返し 蔵(木造瓦葺)、倉庫(木造瓦葺)、学校(RC造)の3種類の発酵状況と色の違いを確認する
	2. 味噌の味見 初めて参加した父親に、子どもがどのように作ったを説明
	3. 麹菌の観察 過去の味噌づくりの様子などを話合う
	4. 今後の活動計画の相談 味噌完成後の味見をどのようにするかの相談
活動後	味噌蔵・穀蔵以外の敷地内建物の見学
味噌の状態の差	
1	蔵の味噌は、湿度が一定の環境で、味噌もカビの発生が少なく
2	プラスチック容器と麹という保管容器の違いで発酵状況が違うと感じられた。
3	学校で保管した味噌は、袋の周辺にたまりができ、またカビも多く廃棄する部分も多かった

参考文献

- 1) 櫻木耕史: 岐阜県における子どもの学校外活動の現状について, こども環境学会合同セミナー研究発表・活動報告梗概集, 第5号, p4-5 2016.9
- 2) 内閣府: 令和4年度版子供・若者白書(全体版), 2022年7月25日
- 3) 一般社団法人日本建築学会歴史的建築データベース小委員会: 歴史的建築総目録データベース, <https://glohb.aij.or.jp/> (最終閲覧日: 2022年3月14日)
- 4) 山本直彦・平尾和洋・宮内杏里: 歴史的風土特別保存地区における民家の屋敷構えに関する研究-明日香村の奥山・飛鳥・野口・岡・島庄の六大字を事例として-, 日本建築学会計画系論文集第81巻第721号, p675-685, 2016.3

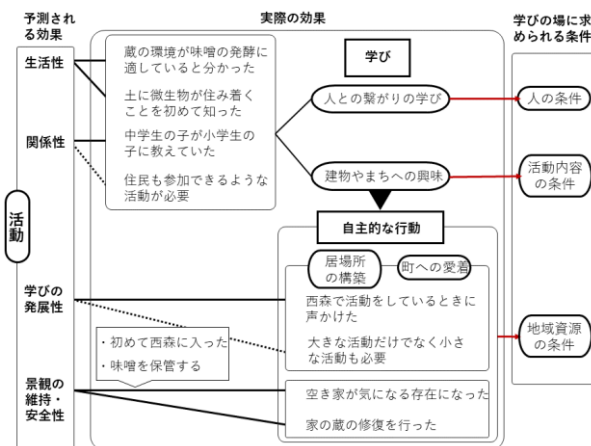


図4 子どもの学びの場の条件

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 櫻木耕史, 武政里奈
2. 発表標題 地域資源を活用した子どもの学びの場の構築に関する研究
3. 学会等名 こども環境学会2023年大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 櫻木耕史 坪井もも
2. 発表標題 岐阜県の地域特性と放課後子ども教室の実施状況 地域における子どもの学びの場の構築に関する研究 その1
3. 学会等名 こども環境学会2022年大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 武政里奈 櫻木耕史
2. 発表標題 大湫宿における子どもの学びの場に関する検討 地域における子どもの学びの場の構築に関する研究 その2
3. 学会等名 こども環境学会2022年大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 櫻木耕史、安藤亜依、坪井もも
2. 発表標題 岐阜県の地域における子どもの学びの場の活動環境に関する研究 瑞浪市大湫町での活動の実施に向けた検討
3. 学会等名 こども環境学会2020年大会（長野）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 櫻木耕史
2. 発表標題 岐阜県内の放課後子ども教室等の現状について
3. 学会等名 こども環境学会第8回合同セミナー
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坪井もも、櫻木耕史
2. 発表標題 岐阜県内全市町村へのインタビュー調査による放課後子ども教室の実施環境
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集（建築計画）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 櫻木耕史、坪井もも
2. 発表標題 各務原市を対象とした地域における子どもの学びの場の活動施設
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集（建築計画）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木村智彦、櫻木耕史
2. 発表標題 栃木県と岐阜県の放課後子ども教室の実施状況について-栃木県と岐阜県の比較-
3. 学会等名 こども環境学会第7回合同セミナー
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------